

『失われた時を求めて』に見るギリシャ神話「フェトン」

菊池博子*

The Greek Myth of Phaéton in 《In Search of Lost Time》

KIKUCHI Hiroko

abstract

In 《In Search of Lost Time》 Marcel Proust introduces some classical literature. Albertine, the hero's love, seems to be associated with Greek mythology of Alcyon that we studied formerly, and also with Greek mythology of Phaéton.

The cited poem of Mallarmé in the novel has the image of Phaéton as an associate to the sky. Proust uses this poem in allusion to Agostinelli, Proust's love, secretary and former chauffeur who is one of the real-life models of Albertine. Phaéton and Agostinelli both had too much confidence, and were killed in an adventurous flying trip. Several years after the death of Agostinelli, the poem was added to the novel in which we see Proust's reproach for the involvement of his secretary in the flying failure rather than his grief. Finally, the word "phaéton" is treated only as a term (a carriage and pair) in the writing, just like Albertine becoming a simple name to the hero.

"Phaéton" seems to be a hidden theme. However, we see in the allusive description of "Phaéton" the transition of the author's mental condition: "sorrow", "blame", and "indifference".

Keywords : Marcel Proust, In Search of Lost Time, Greek myth of Phaéton, Greek myth of Alcyon, Vittore Carpaccio

はじめに

プルーストは『失われた時を求めて』¹⁾の中で、その読者層にとっての常識的な知識の範囲内にあるギリシャ神話等の古典作品に直接的に言及し、又は、間接的に暗示している。これらの古典作品は小説中で恣意的に使われるが、一方、特定の登場人物に特定の神話の暗示が使われている例がある。

語り手の恋人アルベルチーナに関する記述には、以前の拙論²⁾で触れたが、ギリシャ神話「アルシオン (alcyon、鳥のカワセミ)」の暗示がある。本稿では、これに加えて、ギリシャ神話「フェトン (Phaéton、太陽神の息子)」の暗示が、隠しテーマとして用いられている可能性について考察する。更に、小説中では言及されないカルパッチョのある作品 [図版2] とこの隠しテーマとの関連についても触れる。

「アルシオン」、「フェトン」という二つの神話の暗示は小説中の他の登場人物に使われる場合があるが、「アルシオン」についてはアルベルチーナの記述との呼応関係が見られる。

キーワード：マルセル・プルースト、『失われた時を求めて』、ギリシャ神話フェトン、ギリシャ神話アルシオン、ヴィットーレカルパッチョ

*平成17年度生 比較社会文化学専攻

1. ギリシャ神話「フェトン」

以下は、ギリシャ神話「フェトン」の筋書きである。

太陽神エリオスと人間の女性との間に生まれたフェトンは、人々にその生れを証明するため、父が毎日東から西へと運行させている太陽の車を自分に御させてくれと懇願する。何でも願いを叶えるとの直前の約束のため、神ではないフェトンには不可能なことではあったが、父太陽神はフェトンに車を貸し与える。フェトンは車を駆るが、車を曳く馬たちはフェトンに従わず、軌道をそれる。太陽の車の火で天地が焼かれ、収拾がつかなくなったのを見た大神ゼウスは手に持つ雷火をフェトンに投げつける³⁾。

Alors les puissants tonnerre s'éveillèrent dans ces cieux ardents semblaient à jamais bannies; des torrents d'éclairs jaillirent sur Phaéton, et la foudre le fit tomber du ciel enflammé dans les eaux de la mer verdoyante⁴⁾

かくして厚い雲が永久に散らされたとみえる灼熱の空には強大な雷がおこり、フェトンの上に稲妻が迸った。彼は雷火で炎につつまれ空から青々とした海に落ちていった。(以下はこれに続く部分) 川の岸辺に葬られた彼を嘆く妹たちはポプラに変身し、その涙は琥珀となった。[拙訳]

上記で下線を付したいくつかの言葉の意味について、本稿では考察を加える。

なお、フェトンが落下したエリダノス川は、ギリシャから見た落日の方向であるイタリアのポー川であるとされる。フェトンの神話はヴェネツィア地方でよく知られている。

2. 小説中に現れる「フェトン」の暗示

2-1. マラルメの詩「お前の歴史に参入する」

第六篇「逃げ去る女」中に引用された、マラルメ (Stephane Mallarmé, 1842-1898) の詩「お前の歴史に参入する」に、ギリシャ神話「フェトン」の暗示を見ることができる。

引用されているのは次のような場面である。

語り手はバリの自宅でアルベルチヌと同居していたが、彼女は語り手の元を去る。翻意を促そうと、語り手は彼女に、ヨットとロールス・ロイスを贈ろうと申し出る。そのヨットの内部にはマラルメの詩「白鳥」を、ロールス・ロイスの内部には「お前の歴史に参入する」を彫らせようと手紙で申し出る。(IV, pp. 38-39)

プルーストのかつての運転手で当時の秘書アゴスティネリは作家の元を出奔して飛行機学校に入学した。「アゴスティネリはアルベルチヌのモデルの一人である」とのフィリップ・コルブ (Philip Kolb, 1907-1992) の見解は定説となっている。アゴスティネリ宛に書いたプルーストの手紙が、語り手からアルベルチヌ宛の手紙に利用されているのである。プルーストは、アゴスティネリに翻意を促すべく、飛行機とロールス・ロイスを贈る用意をし、飛行機の内部にはマラルメの詩「白鳥」を彫らせると申し出ている。しかし、実生活においては、飛行機の内部に「白鳥」の詩を彫らせるのみであり、自動車の内部には、特に詩を彫らせてはいない。

マラルメの「白鳥」の詩の方については、この詩の内容とアゴスティネリとの関連性について、「湖の氷に捕らわれて飛べない白鳥」を「アゴスティネリが受け取ることのなかった、飛ぶことのない飛行機」に喩えるもの⁵⁾等、これまでも研究者が言及してきた。

二つの詩は Pléiade 新旧両版に収録されているが、1986年に発見されたプルースト生前最後のタイプ原稿に依る Livre de Poche 版では、「白鳥」はタイトルが現れるのみに終わる。「お前の歴史に参入する」の方は内容の引用があり (L.P., p.520)、後者の方に重点がおかれているようである。

語り手がロールス・ロイスの内部にマラルメの詩「お前の歴史に参入する」を彫らせるといふフィクションの背景は、次のように推理できる。

引用された「お前の歴史に参入する」には、ギリシャ神話「フェトン」を示唆する言葉が空の縁語として文飾に使われている。フェトンには、次のようなアゴステイネリとの共通点を見ることができる。フェトンは、自分の力を過信して太陽神である父の車を御し損ね、川に墜落死する。飛行機学校に入学したアゴステイネリは、禁止された海上に一人が出て操縦を誤り、海に墜落して溺死するに至った。フェトンとアゴステイネリに共通するのは、自己の力を過信し自滅した状況が「空から水中への墜落」である点である。

即ち、「お前の歴史に参入する」は、アゴステイネリの死の事実を象徴しているものである。したがって、アゴステイネリの生前に、プルスととの間で話題になることはなく、アゴステイネリの死を暗示するこの詩もプルスとの意識にのぼるはずはないのである。

「お前の歴史に参入する」の中の語：tonnerre, rubis, feu, troue, mourir pourpre la roue, vespéral, chars等は、「フェトン」の暗示と考えられる。

「お前の歴史に参入する」⁶⁾

“M’introduire dans ton histoire”

Stephane Mallarmé

鈴木信太郎 訳

(原文8行省略)

Dis si je ne suis pas joyeux
Tonnerre et rubis aux moyeux
De voir en l’air que ce feu troue
Avec des royaumes épars
Comme mourir pourpre la roue
Du seul vespéral de mes chars.

(訳文8行省略)

言え、雷鳴よ、轂(こしき)の形の紅玉よ
散乱している王国の夢を伴い、輪筒の
穴をこの火が空中に穿つのを見て
嬉々として私は楽しんでいるのではないかどうか
天駆ける私の金輦二輪の中 唯一の
夕暮れの車両が緋色に紫に死んでゆく時

ガードナー・デイヴィス(Gardner Davies, 1921-1991)は、マラルメが、女性の髪を「炎」「落日」に喩えていること、「太陽のドラマ」特に「沈む太陽」に重要性を置いていたことに言及している⁷⁾。又、マラルメは、「古代人は落日を“太陽の死”と見ていた」と言う⁸⁾。

マラルメの「お前の歴史に参入する」の詩の中には、神話「フェトン」中の言葉が「空」に関する縁語として使われていることは明白である。

ギリシャ神話等の情報源になると思われる「19世紀ラールス」の「Phaéton」の項目には、コックスによるこの神話が記載されているが、使われている語には、char, tonnerre, enflammé及びcieux等が見られる。

デイヴィスは、上記の詩の中では、tonnerre, charの二語のみを「フェトン」の暗示と見ているが、彼は更に次のように言う。「詩の中のroyaumes éparsとは、王国のように赤く染まった雲であり、マラルメの『古代の神々』の中でしばしば話題にされている⁹⁾。」

デイヴィスの説を参考に、マラルメが参考に使っていると思われる、オウィディウスの『変身譚』の次のようなくだりを見てみよう。

ailleurs sont épars sur un large espace les rayons des roues brisées et les restes du char mis en pièces¹⁰⁾
向うの方の広大な空間には、壊れた車輪の輻や車の残骸が粉々になっていた。「拙訳」

マラルメがレトリックとして、綴りや音が似た語句同士の暗示、置き換え等を行っていることは、指摘がある¹¹⁾。

『変身譚』中のrayons(手綱)がroyaumes(王国)に変えられ、éparsがそのまま「お前の歴史に参入する」に使われたものと考えることができよう。

「お前の歴史」とコックス、オウィディウスの「フェトン」中の語を比較する。《char》《roue》はこの詩のみに現れるが、《tonnerre》はマラルメの別の詩にも使われている。

表1. マラルメの詩、コックス「フェトン」、オウイディウス「フェトン」中の語の比較

| マラルメ「お前の歴史」 | コックス「フェトン」 | オウイディウス「フェトン」 |
|----------------|------------|---------------|
| char: 車 (太陽神の) | char | char |
| roue: 車輪 (車の) | roue | |
| tonnerre: 雷鳴、雷 | tonnerre | foudroyer |
| feu: 火 | enflammé | flammé |
| air: 空 | cieux | air |
| royaume: 王国 | | rayon 手綱 |
| épars: 散乱する | | épars |

「19世紀ラールス」の中のコックスの「フェトン」、オウイディウスの『変身譚』中の「フェトン」等の中の語が使われているマラルメの詩「お前の歴史に参入する」を、ヨーロッパの知識人プルーストが読んだ時、直ちにこの神話の暗示を読み取ったことであろう。それは、アゴスティネリの暗示に使用するのに最適のものであったはずである。

2-2. 小説の他の箇所に見れる「フェトン」

Pléiade 版の注釈によれば、カルネ 2 に多く見られる飛行機に関する記述には、種々の神話の暗示があるという (III, p. 1677)。

しかし、「フェトン」は、別の神話の蔭に隠れた形で語られてもいるように思われる。

不意に、私の乗っていた馬が竿立ちになった。[...]。頭上 50 メートルほどのところで、太陽にきらきら輝いている鋼鉄の二枚の大きな翼の間に、[...]、人間の顔に似て[...]。私は初めて半神と出会ったギリシャ人と同じように、すっかり感動した。[...]。自分が今初めて見ることになるのは飛行機なのだ。[...]。運転手のことに話をもどすと、「ソドムとゴモラ」、(III, p.417. 鈴木訳、No. 8, p. 322)

上記は第 4 篇「ソドムとゴモラ」において、バルベックで乗馬中の語り手が、始めて飛行機を見る場面である。又、第五篇「囚われの女」には、語り手とヴェルサイユに行ったアルベルチーナが飛行機を見る場面がある (III, p. 907. 鈴木訳、No.10, p. 322)

上記の文例の「半神」とは、バルベックのこの場所が、ギュスタヴ・モローをモデルの一人とする画家エルステイルの『ケンタウロスに出会う若者』の舞台であると、語り手が感じる場所から来ている。

しかし、「フェトン」の主人公も父が神、母が人間である。

神話に出てくるような自転車の車輪の上に身を屈めて、[...]、次には雨の日に戦士ふうのゴムのチュニックにぴっちり包まれ、頭にまいたターバンがまるでヘビをかぶっているように見える彼女がいる。「逃げ去る女」、(IV, p. 7. 鈴木訳、No.11, p. 125)

上記はアルベルチーナの死後、語り手が彼女の生前のイメージをあれこれと思う場面である。すでに指摘されているが、プルーストがフィガロ紙に投稿した自動車旅行の記事中¹²⁾のアゴスティネリの服装が使われている (IV, p. 70)。

例文中の「神話」とは、同じく「花咲く乙女たちのかげに」と「囚われの女」に伏線があるように、アルベルチーナをペルシャ神話の妖精ペリに喩えたものと思われる。

又、アントワーヌ・コンパニオン (Compagnon, Antoine, 1950-) は、「戦士」は草稿中の「(龍退治の) 聖ジョルジュ」から、「蛇」は「メドゥーサ、火傷の跡のある娘」等の名残であると述べる¹³⁾。

しかし、「神話」「車輪」は、「フェトン」をも思わせる。

眠りの車 (char du sommeil) につけられた馬は、太陽の運行を司る馬車 (char du soleil) のように […]、(眠りを覚ますために) 小さな隕石か何かが (どんなく未知の者) の手で蒼天から投げられたのか? […]。どんな槌の一撃をくらって、

「ソドムとゴモラ」、(III, pp. 370-371. 鈴木訳、No.8, pp. 241-242)

上記は、原文で、char du sommeil が、char du soleil のもじりとなっている例である。又、空から (燃えながら) 降ってくる「隕石」はゼウスの雷火を思わせ、coup de marteau (槌の一撃) も同様にゼウスの持ち物とされる槌の暗示となる。

En souvenir d'une promenade que nous avons été faire en phaéton au Val Richer et où je m'étais endormie sur ses genoux. 「ゲルマントの方」、(II, p. 571)

上記は、第三篇「ゲルマントの方」の校正刷りの棒組 (NAF60762) への加筆である。無蓋軽四輪馬車である「フェトン」という語が見られる。ヴィルパリジ夫人が自分の少女時代に植物の知識を与えてくれた人物について語る部分である。この段階での積極的な加筆の必然性は不明である。フェトンの暗示が見えるマラルメの詩「お前の歴史に参入する」は1917年に清書原稿に書かれたが、1918年の棒組の段階でのこの加筆は「フェトン」という語を入れるためであった可能性を否定はできない。

アルベルチーナ「貴方って本当に意地悪よ。 […]。海が私のお墓になってよ。 […]。私はきっと溺れ死ぬわ。水に飛び込んで。」語り手「サッポーのようにね。」

「ソドムとゴモラ」、(III, p. 197. 鈴木訳、No.7, p. 364)

上記は「ソドムとゴモラ」のタイプ原稿 (NAF 16739) への長い加筆の一部分である。「海がお墓」は、この段階でも試みられた「フェトン」の暗示と解釈できる。

1986年に発見された最後のタイプ原稿では、「アルベルチーナはヴィヴォンヌ川のほとりで落馬して死んだ」となっていた (L.P., p. 540)。

実際のアルベルチーナの死に場所として、「海」は設定されていない。

一人 (サン・ルー) は塹壕の前で、もう一人 (アルベルチーナ) は川の中で、(死んだ。) […] アルベルチーナ (は)、 […] 海に沈む夕陽のイメージと結びついて、

「見出された時」、(IV, p. 964. 鈴木訳、No.12, p. 270)

上記は、自分より先に死んだサン・ルーとアルベルチーナへの語り手の思いである。「発見された最後のタイプ原稿」より以前に書かれたもので、この段階では「アルベルチーナは乗馬中に立木に追突して死んだ」とされ、アルベルチーナの死に「川」は出てこない。

草稿 Cahier 56 (NAF16696, fols.102-103) に見られるボンタン夫人の手紙の次の箇所は、この問題の解決の鍵とはならないであろうか。

Vous savez qu'on n'avait jamais retrouvé le corps de ma petite Albertine. Elle était vivante!

精神に異常をきたしたアルベルチーナの叔母ボンタン夫人が、「アルベルチーナが生きていた」と思いこみ語り手に連絡してくる場面である。地上で落馬して死んだのであれば、亡骸が見つからないというはずはない。「探しても見つからなかった」は、水死を示唆していると思われる。この時点の草稿内容が「見出された時」の最終稿に残ったものであろう。

発見された最後のタイプ原稿での「川のほとり」の場所は、語り手が家族と休暇を過ごしたコンブレーに近い

モンジュヴァンのあたりのヴィヴォンヌ川とされている。小説中におけるモンジュヴァンは、語り手がある少女達の同性愛行為を目撃した場所であり、同性愛は、作家にとってのアゴステイネリを意味し得る。

「馬による事故に続く死」は1896年の『楽しみと日々』にも現れる(III, p. 1636)が、1916年のCahier 73 (NAF18323, fol.4v [Proustによる番号])中の「もし私が馬の事故で死ぬ運命だったら」とのアルベルチーヌの言葉により、アルベルチーヌに関連づけられている。

3. 他の神話との関連

第五篇「囚われの女」中で語り手がアルベルチーヌに贈る「品物」として、1917年の加筆の段階で、当時ヴェネツィアで活躍した実在のデザイナーであるフォルチュニーがデザインした「衣装」が現れる。フォルチュニーの青と金の部屋着の模様は、「ヴェネツィアのサン＝マルコ寺院の柱頭によく見かける番いの鳥」で「死と再生」を表す鳥だとされる。

以前の拙論²⁾では、この鳥に「孔雀」と「カワセミ」の暗示があること、カワセミはギリシャ神話「カワセミ(alcyon)」を出典としていること、カワセミが月の女神の寵鳥である事との関連を述べた。カルネ2には、「飛行機」と共に「月」に関する記述も存在する。

アルベルチーヌ創造以前にゲルマント大公妃に使われた「カワセミ(alcyon)」という語が、後にアルベルチーヌにも使われる事実がある。

アゴステイネリの服装描写に使われた言葉は、ゲルマント大公妃にも間接的に使われ、アゴステイネリに使われたcaoutchoucはアルベルチーヌに、coiffé(e)はアルベルチーヌとゲルマント大公妃に、アルベルチーヌに使われたenturbanéeはゲルマント大公妃にも使われる。

第六篇「逃げ去る女」中の「フェトン」の縁語が用いられたマラルメの詩「お前の歴史に参入する」を、作家はアゴステイネリの暗示に使ったと考えられるが、この部分は1917年の清書原稿に現れる。

以上から、ギリシャ神話「アルシオン」と「フェトン」に関する記述が、ほぼ同時期に行われていることが、理解できる。

3-1. カルパッチョのカッソーネ

小説中でアルベルチーヌが好むデザイナーとされるフォルチュニーが、実際に「カルパッチョの絵を参考にした」との情報を、プルーストは1916年に得た¹⁴⁾。「参考にされた」のが「外套」であれば、画家のどの絵を指すのかはすでに知られている。

しかし、「鳥の模様の部屋着」にも適用されると作家が解釈した場合、カルパッチョが一对のカッソーネ(貴族の女性の婚礼用長持)の前面に描いた「番いの鳥」に作家が注目した可能性が考えられる。

以下に、一对のカッソーネのそれぞれの前面に見られる二つの絵を示す。二つの絵の主な登場人物である女性の服装は、全く同じである。

① [図版1] "Departure of Ceyx"¹⁵⁾ 英国ナショナル・ギャラリー・オヴ・アート所蔵。

プルーストのヴェネツィア訪問時の1900年には、大運河沿いのレイヤード館所蔵。

[図版1] 解釈:

①-A. 『聖ウルスラ物語』「許嫁の出会いと船出」の右側部分の繰り返しとする説

「ウルスラが、父王に別れを告げている。」

プルーストは、この説を唱えるモルメンティ等の著書¹⁶⁾を読み¹⁷⁾、ローゼンタール夫妻の著書¹⁸⁾を読んでい¹⁹⁾た。

①-B. ギリシャ神話「アルシオン」とする説

「アルシオンが船で旅に出る夫セイクスに別れを告げている。」

プルーストの死後、ポコルニーは、[図版2]のテーマの一つ「アルシオン」との関連でとらえようとする説を唱えた²⁰⁾。

図版1. Departure of Ceyx. 1502-1507年. Vittore Carpaccio
英国 National Gallery of London 所蔵



図版2. Metamorphosis of Alcyon. 1495-1500年. Vittore Carpaccio
米国 Philadelphia Museum of Art 所蔵



② [図版2] "Metamorphosis of Alcyon"²¹⁾ 米国フィラデルフィア・

ミュージアム・オヴ・アート内ジョンソン・コレクション所蔵。

ブルーストのヴェネツィア訪問時には、ジョン・ラスキンの所蔵（後に親族へ）²²⁾。

[図版2] 解釈：（下線付記は論者）

②-A. ギリシャ神話「アルシオン」とする説

「絵の中央右の女性はアルシオンである。海で死んだ夫の後を追ひ、水中に身を投げようとするが、神の慈悲により、水際に浮かぶ夫と共に、カワセミ（前景左下）に変身させられる。すでに手の先が水掻き（羽毛²³⁾）に変わりつつある。」

ブルーストが1918年に知己を得た²⁴⁾美術評論家ベレンソンによる説²⁵⁾である。

美術評論家スガルビは、鳥が「夭折」「再生」の象徴「五色ヒワ」である可能性について、これを否定する²⁶⁾。

②-B. ギリシャ神話「フェトン」とする説

「絵の中央右の女性はギリシャ神話「フェトン」のフェトンの妹である。父太陽神の車を御し損ね川に墜落して死んだ兄を悼んで泣く妹はポプラに変身する。すでに手の先がポプラの枝に変わりつつある。」

美術評論家シュプリングによる説²⁷⁾である。

ブルーストが①-B.を除くこれらの説を知った可能性はある。[図版1]は、ラスキンが「ヴェネツィアの千一夜」と呼ぶ『聖ウルスラ物語』として見るはずである。

[図版2]に「アルシオン」を見れば、前景の番いのカワセミを、アルベルチーナの部屋着の鳥の候補として見ることが可能である。[図版2]に「五色ヒワ」を見れば、「アルシオン」と同じ「再生」の暗示として使うことが可能である。眠るアルベルチーナの眉や瞼の描写に「alcyon」という語が加筆された(III, p. 580) 1917年とほぼ同時期に——少なくとも1916年以降²⁸⁾——「花咲く乙女たちのかげに」への長い加筆部分の彼女の顔や目の描写に「五色ヒワ, chardonneret」という語が現れる(II, p. 298)が、「囚われの女」中のアルシオンの加筆(III, p. 580)と多少離れた箇所(III, p. 884)の彼女の顔の記述に酷似している。「ゲルマントの方」の校正刷りへのアルベルチーナに関する加筆(II, p. 652)にも五色ヒワの喩えが現れる。なお、他の文学作品にも現れる「アルシオン」は、ウェルギリウスの『農耕詩』の中にも「五色ヒワ」と共に現れている²⁹⁾。

一方、[図版2]に「フェトン」を見て、アゴスティネリの暗示に使うことをこの時点で想起したと仮定した場合、1917年の清書原稿(NAF16719)にマラルメの詩「お前の歴史に参入する」という形でそれが現れることとの整合性を否定はできない。

以上、小説中の「アルシオン」、「五色ヒワ」という語に、又、「フェトン」の暗示に、カッソーネに描かれたカルパッチョの絵が貢献した可能性を考慮に入れることはできよう。

まとめ

定説となっているアルベルチーナとアゴスティネリとの関係は、更にフェトンに結びつけられる。アゴスティネリの死の直後の草稿では、アルベルチーナは「溺れて」死ぬ。1915年のカルネ2には飛行機のテーマが書き込まれていった。「逃げ去る女」の1917年の清書原稿には、「フェトン」を暗示するマラルメの詩「お前の歴史に参入する」の引用が見られ、「花咲く乙女たちのかげに」中には、アルベルチーナの言葉として「ヨット」「自動車」が加筆されている。

相手の自滅的な死を暗示する「お前の歴史に参入する」の引用には、アゴスティネリの突然の出奔に対する作家の非難、又、アゴスティネリの「自信の過剰、誤ったチャレンジ精神」への批判が見えてくる。

語り手からアルベルチーナへの贈り物であるフォルチュニーの部屋着の模様とされる「鳥」のモデルの一つとして、以前の拙論ではアルシオン（カワセミ）を挙げた。

1917年、「逃げ去る女」の清書原稿(NAF16719)に、「失踪したアルベルチーナが語り手にとってすでに名前だけの存在になっていた」との加筆がなされる。「アルベルチーナは[……]名前の形でしか存在しなくなって、[……]人間だった時に愛していた女性*の名前を際限もなく呼びながら啼いたという[……]小鳥(IV, p. 16)」。この箇所に

は、ギリシャ神話「アルシオン」の暗示がある。*神話では「男性」。

1918年には、「ゲルマントの方」の校正刷りの棒組へ、馬車の名としての「フェトン」が加筆されるが、単に「フェトン」という言葉を使うためであった可能性も考えられる。

「忘却され名前だけの存在になった恋人」というテーマが、ほぼ同時期に「アルシオン」と「フェトン」の暗示と共に語られているのである。ある時期から、作家はアゴスティネリを忘却しはじめる。「名前だけの存在」の記述は、それと全く無関係とは考えにくい。

一方、1916年に「フォルチュニーが参考にしたのはカルパッチョである」との情報を得た作家が、それが「鳥の模様の部屋着」にも該当すると解釈した場合、カルパッチョの絵の一つである[図版2]に行き着いた可能性が考えられる。

[図版2]の解釈に現れる「アルシオン」という語が、清書原稿³⁰⁾とタイプ原稿の段階での加筆、「五色ヒワ」と「フェトン」を含む記述が校正刷りの段階での加筆として現れる。[図版2]が——ラスキンが一時所有していた事実も加え——これら三者の暗示と共に作家の興味を惹いた可能性は否定できない。

小説中で使われる「アルシオン」という言葉は、当時の知識階級に知られていた「アルシオンの巢」という熟語的表現が使われることもあるのに対し、「フェトン」という言葉は、終始小説の表面には現れず、「馬車」という意味で使われるにすぎない。「フェトン」を思わせる記述も、他の神話の蔭に隠れており、「フェトン」は終始隠しテーマであった。

しかしながら、執筆の内容を追ってゆくと、アゴスティネリを思わせる「フェトン」の示唆には、作家の秘書の不慮の死に伴う「悲しみ」、「非難」、「無関心・忘却」が、小説中にも同じ順で現れることが理解できる。

註

1. Marcel Proust, *A la Recherche du temps perdu*, Pléiade, Gallimard, 1987-1989. Marcel Proust, *La Prisonnière suivi de Albertine disparue*, Livre de Poche (L.P.), 1993. 和訳: マルセル・プルースト、鈴木道彦訳、『失われた時を求めて』、集英社、1996-2001. 引用・参照は、巻数・ページ数、号数・ページ数を()内に記す。
2. 菊池博子「プルースト『失われた時を求めて』におけるゲルマント大公妃とアルベルチーナの変身と再生一月と水をめぐって」、お茶大『人間文化論叢』、第9巻、2007、pp.13-21.
3. *Grand dictionnaire universel du XIX^e siècle*, Pierre Larousse, 1866-1876, p. 747. George Cox (1851-1902) 執筆.
4. Publius Ovidius Naso, *Les Métamorphoses*, Gallimard, Folio classique 2404. <http://atlantides.free.fr/txtphaeton.htm>
5. 上村くにこ『白鳥のシンボリズム』、御茶ノ水書房、1990、p. 272.
6. 鈴木信太郎『鈴木信太郎全集』、II、平井啓之編、大修館書店、1972、p. 92.
7. Gardner Davies, *Mallarmé et le Drame solaire*, José Corti, 1959, p. 13.
8. 菅野昭正『ステファヌ・マラルメ』、中央公論社、1985、p. 638.
9. Gardner Davies, *op. cit.*, p. 156. 10. *ibid.*, p. 156.
11. 上村くにこ、前掲書、p. 267. 12. Le Figaro, 19 novembre 1907.
13. Antoine Compagnon, *Proust entre deux siècles*, Seuil 1989, pp. 116-126.
14. *Correspondance*, Plon, XV, 1987, p. 49. de Marcel Proust à Maria de Madrazo, 1916. 26 付.
15. 英国 National Gallery of London のフィルムをプリント。Ceyx はアルシオンの夫の名。
16. P. Molmenti and G. Ludwig, *The Life and Works of Vittorio Carpaccio*, John Murray, London, 1907, p. 100, 200.
17. Theodore Johnson, Jr., 《La place de Vittore Carpaccio dans l'œuvre de Marcel Proust》, in *Melanges à la mémoire de Franco Simone*, III, Editions Slatkine, 1984, p. 675.
18. G. et L. Rosenthal, *Carpaccio*, H. Laurens, 19-, p. 43.
19. *Correspondance*, Plon, VII, 1981, p. 40. de Marcel Proust à Auguste Marguillier, 1907. 1 頃
20. W. Pokorny, 《Carpaccio's Alcyone Cycle》, in *Burlington Magazine*, 1966, August, p. 417.
21. 米国 Philadelphia Museum of Art 提供のフィルムよりプリント.
22. Guido Perocco, *Tout l'œuvre peint de Carpaccio*, Flammarion, 1981, p. 95.
23. Jan Lauts, *Carpaccio; painting and drawings*, Phaidon, London, 1962, p. 30.
24. Jean-Yves Tadié、吉川一義訳、『評伝 マルセル・プルースト』(下)、筑摩書房、2001、p. 446.

菊池 『失われた時を求めて』に見るギリシャ神話「フェトン」

25. Bernard Berenson, *Venetian Painting in America*, G. Bell and Sons, London, 1916, p.157.
26. Vittorio Sgarbi, *Carpaccio*, Abbeville Press, New York, 1994, p.106.
27. Paul Schubring, *Cassoni, Truhen und truhenbilder der italienischen fruhrenaissance*, W. Hiersemann, Leipzig, 1915, p.392. 『西洋シンボル事典』 八坂書房、2003, p.119
28. Alison Winton, *Proust's Additions, II*, Cambridge Univ. Press, Cambridge, 1977, p.50
29. Virgile, traduit par E. de Saint-Denis, *Georgiques*, Les Belles Lettres, 1982, p.50.
30. Alison Winton, *op.cit.*, p. 146.

(2007年12月1日受理)